

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520363

研究課題名(和文) 早期辞賦の伝承と「作者」をめぐる伝説 司馬相如・宋玉を中心に

研究課題名(英文) The tradition of early Cifu literature and the legend of the "author": mainly on Sima Xiangru and Song Yu

研究代表者

谷口 洋 (TANIGUCHI, Hiroshi)

奈良女子大学・研究院人文科学系・教授

研究者番号：40278437

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：前漢までの文学は、作者とされる人物の伝説とともに伝承された。司馬相如の場合、戦国の伝説の枠組みをとどめつつ、庶民の欲望を体現したキッチュなヒーローとして語られてゆき、その人物像が「長門賦」にまつわる伝承につながってゆく。宋玉ともなると、伝承と「作品」との境界すら曖昧であり、その「作品」は、むしろ後世における文学概念の定立に伴って析出されたものである。前漢の賦は現存数は少ないとはいえ、史書の伝記に収められ、比較的完全な形で伝わるが、それも作者の伝説と結びついているためである。以上の研究に加え、これまでの国内の辞賦研究の全体を見渡すことのできる文献目録を作成した。

研究成果の概要(英文)：The literature before the Former Han era was handed down with the legend, and the central figure of the legend was regarded as the author of the literary work. Sima Xiangru was told as a kitschy hero who expressed the popular desire under the influence of the tradition of Warring States, and such image led to the legend related to "Changmen Fu." Even the boundary of legend and a "work" was ambiguous and, in the case of Song Yu, the "work" rather came into existence in conjunction with the literary concept in later ages. Although there are few existing of Fu in the Former Han era, but they are stored in the biography of history books and transmitted in comparatively perfect form, it is because they are also connected with the author's legend.

We also made the bibliography on Fu literature studies in Japan, it could survey the whole research in this field.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学 辞賦 司馬相如 宋玉 伝説 テキスト 史記 文選

1. 研究開始当初の背景

本研究は、直接には、研究代表者が平成21年度まで受給した科学研究費補助金基盤研究(C)「戦国秦漢期の諺・歌謡・文学作品と物語「テキスト」を核とした「語り」の展開」(以下「前研究」と称す)の成果を受け継ぎ、それをさらに発展させようとしたものである。

前研究は、諺・歌謡・文学作品など、ある形をもった、他とは区別される言語表現(ここではそれを、書かれたものであるか否かにかかわらず「テキスト」とよんだ)が、古代にあっては、常に物語的伝承の中で伝えられることに着目した点で、本研究の着想の基礎となったものである。

辞賦文学について言えば、屈原・宋玉、さらには前漢の作品とされるものは、おおむね何らかの形で、それぞれの作者をめぐる伝説と結びついて伝わっている。たとえば『楚辞』は屈原の悲劇的な生涯と結びつけられ、賈誼の作品もその延長線上で語られた。作品が、同時代人あるいは後人によって紡がれる、「作者」をめぐる物語の中で伝承される状況に転機が訪れるのは、前漢末の揚雄が、自作を引用して自己を語る「自序」(『漢書』揚雄伝はこれに拠る)を著してからであり、後漢に至ると、賦の作者が自ら序を附して、作品の読みを規定することが始まる。「テキスト」と物語の関係に、決定的な変化が起こったのである。

以上のことは、前研究の成果である「試論 両漢“賦序”的不同性質」(『済南大学学報(社会科学版)』2008-2)、「賦に自序をつけること 両漢の交における「作者」のめざめ」(『東方学』119、2010)などの論文に述べたところであるが、そこでは、資料的な制約もあって、揚雄以降の変化を論じることが中心となり、前漢における「テキスト」と物語の関係については、まだ論じる余地が残されていた。

さらに考慮すべきは、前漢までの「作者」の物語について考える際、考察の範囲を漢代だけに限ることはできないということである。たとえば宋玉の場合、作者に関する資料はほとんどが六朝期のものであり、作品のテキストも、『楚辞章句』に収められた「九辯」を除けば、『文選』ほか六朝期以降のものばかりである。宋玉の作品がすべて六朝の偽作であるというような速断を避けるとしても、われわれの見る宋玉が、六朝人の描いた像以上にさかのぼり得ないという点は、認識しておかねばなるまい。

司馬相如の場合は、同時代の司馬遷が伝記も作品も残してくれたとはいえ、その後も彼をめぐる伝説が増殖し続けていたことは、『西京雜記』等の記述に見るとおりである。『文選』が初出の「長門賦」など、伝承に問題のある作品も、そのような基盤の上に現れたと考えられる。

すなわち、前漢までの「作者」と「作品」について考える際には、作者に関する伝説が

文献に出そろう、作品が文学総集等に結集される、六朝後期までを視野に入れる必要がある。その際注意すべきは、それらの資料が事実の単なる記録ではなく、それぞれの時代の伝承を反映している点である。

宋玉の場合、作者や作品に関する考証は古くからあり、最近では高秋鳳『宋玉作品真偽考』1999、呉広平『宋玉研究』2004などの著もあるが、それらはみな、伝承を、事実を知るための資料としてのみ用いている。近年中国で見られる、司馬相如の故里に関する考証でも、六朝期の資料が、事実を記したのものとして無批判に用いられている。しかし前漢までの「作者」「作品」と伝承とのあり方に照らせば、こうした方法論は再検討を要するだろう。

本研究は、以上に述べた、前研究で残された課題、前研究から新たに導き出された課題に答えるべく計画されたものである。それは、宋玉や司馬相如に限らず、ひろく前漢までの文学を研究する上での、根本的な問題提起なのである。

2. 研究の目的

本研究の直接の目的は、宋玉や司馬相如の「作品」として伝わっているものが、いかにして今見るような形になったかということを知ることである。作者をめぐる事実や、作品の真偽に関する考証ではなく、作者がそれぞれの時代にどのように見られていたか、作品のテキストがいかにして集の形に編まれたかということが関心の対象となる。

宋玉の資料が専ら六朝に下るものであり、ほとんど伝説上の人というべき存在であるのに対し、司馬相如は『史記』に伝があり、作品も収められている。両者を比較することで、伝説の性質についてより深く吟味することもできよう。

宋玉や司馬相如についての研究を通して、前漢までの時期における作品の伝承と作者の伝説との関係について、ひろくあてはまる原理を明らかにすることが、本研究の最終的な目的である。それによって、たとえば枚乗のように、まとまった形で伝説を残さず、作品だけが伝わっている場合についても、ある程度説得力のある考察が進められるだろう。

3. 研究の方法

(1) 研究の視点

本研究の特色は、辞賦作品をただ辞賦だけでとらえるのではなく、それをとりまく物語的伝承の中において考える点にある。通常の文学研究では、研究対象としてまず作品のテキストを他から切り離し、その他の情報は、テキストの解釈を助けるコンテキストとしてのみ利用する。しかし、古代文学の伝承のあり方に照らせば、テキストとコンテキストとの間にそのような階層性を設定することがどこまで可能なのか、疑問の余地がある。作品のテキストは、それをとりまく伝承という、よ

り大きなテキストの中に投げ込まれて伝えられたという方が、実態に近いと考えられるのである。伝承に反映した事実の穿鑿に汲汲とする前に、物語的な伝承は、まずは物語として読み解いてみるどころから始めるのが、真の意味での実証であろうと、本研究は考える。

従って、研究の目的にも示したように、本研究は、作品の真偽や、作者をめぐる事実関係には拘泥しない。戦国の楚の宮廷に、宋玉という宮廷文人がいたのは事実であったかも知れない(そうでないかも知れない)。それより重要なことは、漢代には既に、宋玉は屈原の後継者として位置づけられており(『漢書』芸文志詩賦略)六朝後期には、賦をはじめとする多くのジャンルの祖として、『文選』にその作品とされるものをいくつも載せていることである。

司馬相如が漢武帝に仕えたのはもちろん事実であり、『史記』の内容も一応信用してよからうが、ここで興味深いのは、しばしば問題になる「長門賦」の序の内容が『西京雜記』の描く世界に近いことであり、しかも『西京雜記』のような話の生まれる素地が、『史記』の段階で既にあったとおぼしいことである。

このように、本研究では、「作者」「作品」といった概念を固定したものではなく、たえず流動しつつ生成するものと見る。「作者」とは、作品を作り出した現実の主体であるというだけではなく、作品の受容者によって語られ作られてゆくものでもある。「作品」もまた、書かれた実体として存在するということだけではなく、「作者」をめぐる物語というより大きなテキストに放り込まれたものでもある。

このような本研究の立場は、文学研究においては暗黙の前提とされがちな「作者」「作品」の概念を根本的に見直すものであるが、われわれがこのような「作者」というものがまだ成立していない時期の文学については、そのような視点によってこそ、十分に理解することができるのである。

(2) 具体的方法

同時代における司馬相如像とその賦の伝承

『史記』『漢書』の司馬相如列伝には、「天子遊獵賦(子虛上林賦)」「大人賦」をはじめとする相如の代表作を収めており、その限りでは伝承に何の問題もない。ただし、『史記』の時点で、司馬相如の人物像とその作品の受け止め方に、既に一種の分裂が生じていたことは看過できない。

すなわち、『史記』は、相如が前代の「客」にあこがれていたことにふれ、武帝への諫言、西南夷への通交など、その「客」としての活動を述べる。「天子遊獵賦」「大人賦」もその文脈で引用され、司馬遷は賛でそれらの諷諫精神を指摘する。ところがその一方、卓文君との恋愛を突らせ、消渴のため政務には関わらなかつたなど、相如は、天賦の才のおかげで全てを手に入れ気楽に暮らした男として語

られていたようでもある。

研究代表者はさきに、「從「七発」到「天子遊獵賦」 脱離上古文学伝統、確立漢賦表現世界」(『四川師範大学学报(社会科学版)』32-5、2005)において、「天子遊獵賦」の表現が、古代の文学的果実を受け継ぎつつもそこから古代的宗教性を抜き取り新たな世界を築いたことを論じたが、本研究では、賦を取り巻く相如伝説と、その作品の伝承とのかわりを論じる。

六朝における司馬相如像と「長門賦」との関係についての研究

司馬相如の作とされる「長門賦」には、陳皇后が司馬相如に黄金百斤を賜って賦を作らせたおかげで武帝の寵愛を取り戻したという、史実に合わない序がついている。その真偽はさておき、これは『西京雜記』にみえる、王昭君が画工に賄賂を贈らなかつたために醜く描かれ匈奴に嫁がされたという話と、ちょうど対照的な内容になっている。宮廷秘話ではあるが、陰湿な暗さがなく、漢の宮廷に対する素直なあこがれと好奇心を反映する「長門賦」の序は、いわば『西京雜記』的世界観に彩られたものといえるが、司馬相如もまた、魔術的な言語能力を駆使する人物として、『西京雜記』にはしばしば登場する。この点からすると、『西京雜記』に代表されるような司馬相如像が、「長門賦」の序とも関わりをもっているように思われる。こうした点にも注意しつつ、六朝における司馬相如の伝承をたどり、「長門賦」とのかかわりを考察する。

宋玉伝説の展開と作品テキストの定着

宋玉については、司馬相如のように比較的信頼できる伝記記述があるわけではなく、前漢の劉向『新序』に彼をめぐる逸話として収められていたものが、『文選』では「対楚王問」の名でその作品として採られるというように、伝説と作品との相互侵犯的状况さえ見られる。

宋玉の伝説は、前漢から六朝期にかけて、屈原の後継者、辞賦文学の祖、宮廷文学者の嚆矢として成長していった。その作品とされるものは、司馬相如の場合以上に、作者の伝説と密接に関わっている。それが作品として定着するには、六朝期における、文学テキストの集への結集という問題が絡んでいる。これらの問題の追究を通して、宋玉の「作品」がどのようにして『文選』のような形に定着したかについて解明する。

研究の総括と古代文学全体に共通する問題の抽出

宋玉も司馬相如も、伝説の衣をまとった作家であり、その中で作品が伝えられてきたのではあるが、同時代の史書に記される司馬相如と、信頼できる資料の全くない宋玉とでは、伝説化の程度や、作品と伝説との関わり方が全く異なる。この両者の研究を通じて、古代文学全体に共通する問題を抽出し、たとえば

枚乗のように、まとまった伝説を伝えない作者の場合についても、ひとつの仮説を提示することを旨とする。

辞賦研究に関する文献収集と目録作成

文献目録作成は、研究の動向を把握するという意味で、研究の準備作業でもある。申請者はさきに、中国における多くの成果に助けられ、「国際辞賦学学術研究会について あわせて辞賦研究の動向にふれて」（『中国文学報』2006）を執筆し、中国の辞賦研究の概況を述べた際、国内の研究動向については別の機会に述べることを表明したが、種々の事情で未だ果たしていない。

その後『中国文学研究要覧 古典文学1978～2007』（川合康三監修、日外アソシエーツ、2008）の編集に協力したが、これはコンピュータで収集したデータに基づき加筆修正したものであって、各論著の内容を十分把握したわけではなかった。

コンピュータによる検索は日進月歩であるが、しかしそうであるからこそ、人の目を経た分類目録の重要性はむしろ高まっている。本研究で主たる対象とする宋玉・司馬相如はもとより、辞賦研究の全体を見渡せるような文献目録の作成を行う。これには人手が必要であるから、大学院生を研究協力者として加える。

4. 研究成果

研究の具体的方法として上に挙げた ～ について、それぞれの成果を報告する。

同時代における司馬相如像とその賦の伝承

司馬相如の最初の伝記である『史記』司馬相如列伝には、ほとんど彼の作品の引用からなるという特殊性がある。そのため、作業の前提として、『史記』に引かれる作品の本来の性質を確認しておく必要が生じた。

そこでまず学術論文 4. において、相如の代表作でもある「天子遊獵賦（子虚上林賦）」の、特に核心となる部分である、天子の反省と善政の場面について、表現論的分析を行った。その結果、天子の反省の表現には道家文献と共通性があり、それは起源的には神霊との合一を表すものであること、善政の場面では三字句が頻出し、それは本来儀礼における神霊への誓詞と関連したことが明らかとなった。いずれの場合にも、司馬相如は、それらの表現に付随していた靈性を払拭し、狩の形象、辞賦という文体を、現実の天子を描くものに作り替えたのである。この点は、研究代表者のこれまでの研究を補強するとともに、司馬相如作品がどのように受容されていったかを考える際の起点となるものである。

引き続き、『史記』司馬相如列伝の検証を進め、以下の点を明らかにした。相如が戦国の遊説家蘭相如にあやかって改名した事実には、戦国の遊説家が舌先三寸で出世した庶民的ヒーローとしてとらえられていた当時の気

風が伺える。相如自身も、主君に献策する遊説家のように、状況に応じて次々に皇帝に作品を奉るが、それは戦国時代の政治的アクチュアリティを欠いたキッシュであり、伝承ではその面がさらに増幅される。卓文君との恋愛譚も、貧士が自らの策によって地位を得るという遊説家の立身出世譚をふまえて、智・勇・義という遊説家の価値を、金・色・情というより庶民的な価値に置き換えたものとして理解できる。さらに、相如が晩年持病に苦しんだ事実は、政治の中枢に参与できない挫折を隠蔽するのみならず、彼の特異な言語能力を保証する一種のステイグマとして作用する。このような通俗性と神秘性を帯びた司馬相如像が、彼の没後まもなく形成されていたのである。

この点は、まず学会発表 11. において全体の構想を述べたのち、大きく前半と後半とに分けて発表した。まず司馬相如晩年の一種の神秘性について、「口吃」「消渴」などの病に関する記述に注目し、相如と何らかの共通点を持つ韓非・張良・東方朔との比較によって論じた。戦国期には、著述や弁論にまつわるいささか怪しげな話がひろく見られるが、それは韓非においては神秘性を失って悲劇となる一方、張良の場合には神仙との関わりを保ちつつ功臣を顕彰する話となった。相如は東方朔と同様通俗化した形で語られるが、その病は最後には封禅という国の大事のきっかけを作るものとして作用するのである。その内容はまず学会発表 5. で述べたのち、当該研究会の会誌に雑誌論文 2. として掲載した。

一方前半については、雑誌論文 1. にまとめて公刊した。司馬相如の人生は、前漢武帝期に普遍的な「戦国の子」の挫折という型にあてはまりつつも、庶民の欲求をすべて実現した幸福な男として語られる。卓文君との恋愛譚も、戦国游子の伝説と同一の構造を持っているのであるが、その内容は完膚無きまでに骨抜きにされており、そこに相如がキッシュなヒーローとして消費されてゆくさまが見られている。

以上は司馬相如列伝にみる同時代の相如伝承についての考察であるが、『史記』には司馬遷の相如に対する見方も反映しており、それは当時の伝説に見るものとかかなりのずれがあることも、本研究において示された。すなわち、相如についての司馬遷の論述には、相如を戦国以来の「諫言の士」の枠組みで理解しようとする姿勢と、その枠に収まらない同時代の伝承に対する困惑とが混在しているのである。この点は学会発表 6. で発表し、論文集として刊行される予定で、既に入稿している。

六朝における司馬相如像と「長門賦」との関係についての研究

「長門賦」については、本文はともかく、陳皇后が相如の賦のおかげで寵愛を取り戻したという序の内容が史実に合わないことは確

かである。学会発表 8. では、その背後に、庶民的性格をもちつつ宮廷の寵児となったアイドルとしての司馬相如像と、陰湿な宮廷内抗争の当事者から悲劇のヒロインへと変貌した陳皇后の人物像とがあったことを論じた。「長門賦」は、実際の作者が誰であれ、相如の作として伝承される必然性があったのである。

宋玉伝説の展開と作品テキストの定着

この点については、宋玉の「作品」とその伝説に関する包括的な考察から出発した。『文選』でその作とされる「対楚王問」が劉向『新序』では宋玉の逸話として収められるが、そもそも宋玉において、その伝説と「作品」とは本来不可分であり、「宋玉文献」としか呼びようのないものであった。のちに史・子・集三家が分立し、各々がそれぞれの立場で文献を整理したことが、今日見るような「混乱」をもたらしたにすぎない。ことに魏晉以降、文学と文学者を系譜づける動きの中で、宋玉とその作品は様々な文学の源流に位置づけられ、『文選』に見るような姿に定着したのである。以上は学会発表 12. で構想を述べたのち、特に後半を集の編纂との関わりから見直して学会発表 10. で発表し、さらに「作者」と「作品」をめぐるより根源的な問題の例として学会発表 9. で発言した。なお学会発表 12. の内容は、補訂の上論文集として刊行される予定であり、既に入稿している。

次いで、現在伝わる宋玉賦のテキストそのものに対する考察を行った。特に序と本文、作中人物の対話等に着目し、現在総集に収める宋玉賦が、はじめから完結した「作品」として存在したのではなく、篇としてどう数えるかということさえ確定しがたい流動的なものであり、伝承の過程で分割・併合などの編集が施されたものであることを、具体的に明らかにした。宋玉賦については、これまでまったく作者や成立年代などテキスト外部の問題が論じられてきたが、根源的な問題はテキストの内部にこそ存するのである。この点は学会発表 7. で述べたあと、抜本的に改稿して雑誌論文 3. として公刊した。

研究の総括と古代文学全体に共通する問題の抽出

個別の研究を超え、前漢までの文学の研究にひろく資する問題の究明を目指し、学会発表 2. において、漢賦の伝承と物語的伝承との関連について考察した。

前漢の辞賦は、現存数は少ないが、完全な形で伝わるものが比較的多く、一方後漢の辞賦は、残存する作品数は前漢より多いが、多くは断片である。その理由を考えるに、前漢の辞賦は作者の伝説と不可分であったため、選ばれた少数の作品が伝説と強く結合し、それが史書に丸ごと採録されたと考えられる。それに対し後漢には、作者自身に作品を残す意識があり、集の編纂によってその手段も確

立していったため、多くの作品が隋唐まで残って類書にしばしば節引され、その後の文集の散逸によって断片化したのである。『漢志』『隋志』における漢賦の著録状況からも、前漢の賦は後漢の賦に比べかなり早い段階で淘汰されていたことが考えられる。それは作者の伝説と結びつかなかった作品が消えていったことによると思われるが、一方で、伝説と結びつけば、事実とはもかくその人の「作品」として伝わり得るのである。『西京雜記』に収める前漢人の賦には『漢志』に著録されない作者のものを含むが、これらもそのような視点から捉えられるだろう。作品発表原稿は複数の委員による査読を経て、2014年に刊行される論文集に掲載される。

辞賦研究に関する文献収集と目録作成

研究協力者として奈良女子大学大学院の西川ゆみ・横山きよみの協力を得て、「国内辞賦研究文献目録(稿)」を作成した(図書 1. 及び「その他」)。宋玉・司馬相如に限定せず、広く楚辞を含めた辞賦について、1945年以降に発表された論文と、明治以降に発行された図書とを採録しており、わが国における辞賦研究の動向を一覧することができる。

本研究では、以上のほか、唐代の律賦における漢賦にまつわる故事のあり方(学会発表 1.)や、前漢の王褒の楚辞作品に見られる「九歌」と屈原との結びつき(学会発表 4.)について発表した。これらは、本研究の進展で得た知見、とりわけに示された問題を、より広い対象に適用したものであり、本研究の今後の展開の方向と可能性を示したものと見える。

また、日本中国学会次世代シンポジウムの依頼を受け、宋玉をめぐる問題について、これまでの研究に基づいて発言した(学会発表 3.)。当該シンポジウムは、「中国学におけるテキストの諸問題」を統一テーマとしたものであるが、そこで発言の機会を与えられたことは、本研究が提示する「作品」あるいは「テキスト」に対する視点が、ひろく学界に対する問題提起として注目されていることを示すであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

1. 谷口 洋、『史記』司馬相如列伝の一面 同時代人は相如をどう語ったか、叙説、査読無、41、2014、24-52
2. 谷口 洋、口吃と消渴 司馬相如の後半生に見る著述と病の語られ方、桃の会論集、査読無、6、2013、27-40
3. 谷口 洋、巫山の朝雲 宋玉賦の不定形さについて、叙説、査読無、40、2013、237-251
4. 谷口 洋、司馬相如「天子游獵賦」におけ

る天子の自失と善政の場面について、叙説、
査読無、38、2011、350-363

〔学会発表〕(計 12 件)

1. 谷口 洋、跳出考場、径入漢廷 晚唐律賦
中的漢賦世界、科挙与辞賦: 国際賦学研究会、
2014年03月22~23日、香港大学
2. 谷口 洋、西漢辞賦の流伝与伝説、第九屆
漢代文学与思想學術研討会、2013年11月23
~24日、国立政治大学(台湾)
3. 谷口 洋、高唐台の雲と夢 古代文学にと
ってテキストとは何か、日本中国学会第2回
次世代シンポジウム(招待講演)、2013年10
月14日、秋田大学
4. 谷口 洋、論王褒的《九懷》 并談楚辞文
学兩大系統与其継承、楚辞学国際學術討論会
暨中国屈原学会第十五屆年会、2013年08月
16~20日、中州鶴河飯店(中国河南省西峡県)
5. 谷口 洋、口吃と消渴 司馬相如後半生の
神秘化をめぐる、桃の会、2013年03月23
日、京都大学楽友会館
6. 谷口 洋、再論《史記・司馬相如列伝》
司馬遷如何看相如其人其賦?、辞賦理論与文
類研究: 国際賦学研究会學術論壇、2012年11
月16~18日、シンガポール国立大学
7. 谷口 洋、浅談宋玉賦的叙述模式、第十屆
国際辞賦学學術研討会、2012年10月09~13
日、貴州師範大学(中国)
8. 谷口 洋、《長門賦》与六朝人心目中的司
馬相如、中国文選学会第十屆年会暨成立二十
周年国際學術研討会、2012年08月24~27日、
河南大学(中国)
9. 谷口 洋、甚麼是“作品”、誰是“作者”
從宋玉賦説起、漢学与物質文化国際研討会
(招待講演)、2012年05月11日、京都大学
10. 谷口 洋、六朝の総集における先秦兩漢
の「作品」について、六朝學術学会大会第15
回大会、2011年11月4日、二松学舎大学
11. 谷口 洋、西漢人如何接受相如賦? 論
『史記』司馬相如列伝の多重性、第九屆国際
辞賦学研討会、2011年10月21~24日、鯉城
大飯店(中国福建省泉州市)
12. 谷口 洋、從『文選』所収宋玉作品看“作
品”概念的演進、『文選』与中国文学伝統国際
學術研討会、2011年8月24~27日、華東飯
店(中国江蘇省南京市)

〔図書〕(計 1 件)

本研究の成果の一部として、下記の目録を少
部数印刷した。

1. 西川ゆみ・横山きのみ・谷口 洋、国内辞
賦研究文献目録(稿)、2014、37ページ

〔その他〕

上記「国内辞賦研究文献目録(稿)」は、
researchmap の代表者のページで公開してい
る。

[http://researchmap.jp/muqixstrc-1946238/
#_1946238](http://researchmap.jp/muqixstrc-1946238/#_1946238)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 洋(TANIGUCHI, Hiroshi)
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号: 40278437

研究協力者

西川 ゆみ(NISHIKAWA, Yumi)
奈良女子大学・大学院人間文化研究科・博士
後期課程3年
横山 きのみ(YOKOYAMA, Kinomi)
奈良女子大学・大学院人間文化研究科・博士
後期課程3年